

仙教文学を読む

大久保良順編



講談社

仏教文学を読む

大久保良順編

講談社

仏教文学を読む

定価 一〇〇〇円

昭和六十一年十一月一日 第一刷発行

編者 大久保良順

発行者 野間惟道

発行所 株式会社講談社

〒一〇二 東京都文京区音羽二二二
電話 東京(〇三) 九四五―一二二(大代表)

編集 株式会社講談社出版研究所

代表 長谷川喜市

〒一〇二 東京都文京区小日向四一六一 九 共立会館
電話 東京(〇三) 九四三―二六二三

印刷所 信毎書籍印刷株式会社

製本所 株式会社黒岩大光堂

©大久保良順一九八六年 Printed in Japan
落丁本・乱丁本は小社書籍製作部宛にお送りください。
送料小社負担にてお取り替えいたします。

序

本書を大正大学創立六十周年記念として刊行することは、まことに望外の喜びとするところである。

本学では、大学独自の公開講座と、東京都豊島区教育委員会との共催による公開講座とを毎年開講してすでに長い。昭和五十九年秋の二度にわたる共催の公開講座が「仏教文学の世界」と題されたが、このときは極めて多数の参加者をえた。その際に、この講座の企画を出版してほしいという多数の要望をうけて、大学出版委員会で検討していたところ、本学創立六十周年記念の一環として、刊行するのがふさわしいということで話がまとまった。

もちろん、私ごときは長い間この種の研究から遠ざかっており、古い研究をもとに講じた者として、誠に忸怩たるものを感じてはいるけれども、出版部の意向に従って、そのまま出版することにした。なお、当初は、『源氏物語』や『今昔物語集』などの、しかも特

殊部分の講演に過ぎなかった各論を中心にして、新たに、序章「仏教文学とは何か」と「現代文学と仏教」とを加え、さらに文献一覽によって、不足部分を補う形式をとって、ここに上梓することとした。この点を諒解されたい。

講談社出版研究所の快い申し出と、編集担当の横尾俊彦氏に、心からお礼を申し上げる次第である。

昭和六十一年十月

大久保良順

仏教文学とは何か

山田昭全・石上善應

- 一 「仏教文学」の二系列 4
- 二 仏教学者の仏教文学観 5
- 三 国文学者の仏教文学観 7
- 四 日本仏教の特異な文献構造 12
- 五 筑土学説の矛盾 15
- 六 宗教と文学とは表裏一体 17
- 七 宗教と文学との連続性の確保 20
- 八 日本仏教文学の構想 22
- 九 小林太市郎・遠藤周作・峰島旭雄の説 25
- 十 インドの仏教文学 31
- 十一 中国の仏教文学 39

物語文学と仏教(一)——平家物語

山田昭全 45

- 一 『平家物語』の主題 46
- 二 清盛の病死 49
- 三 義仲の最期 54
- 四 宗盛父子の刑死 62
- 五 『平家物語』における生と死 67

物語文学と仏教(二)——源氏物語

大久保良順 75

- 一 『源氏物語』と『法華経』 76
- 二 苦とその解決 81
- 三 四季と女性 91
- 四 生ける仏の御国 95
- 五 小説論 98
- 六 「もののあはれ」と実相観 101

自照文学の仏教性——方丈記

榊 泰純 105

一 ゆく河の流れは…… 106

二 世の不思議 110

三 草庵生活中の音楽 118

四 琵琶「手習」 123

五 秘曲づくしの波紋 127

六 我、草庵を愛す 133

仏教説話の世界——今昔物語集

石上善應 137

一 『今昔物語集』の現代性 138

二 仏教説話の変遷(一)——一角仙人の伝承 143

三 仏教説話の変遷(二)——月の兔伝説 149

四 『今昔物語集』の宗教性 161

現代文学と仏教

杉崎俊夫
169

一 無明と超克 170

二 煩惱即菩提の文学——嘉村礒多 173

三 愛欲地獄の文学——丹羽文雄 185

四 懺悔の文学 206

〈文学と仏教〉文献一覧

清水宥聖
211

仏教文学を読む

装帧
熊谷博人



釈迦如来像（国宝・清凉寺蔵）

一 「仏教文学」の二系列

今日「仏教文学」という用語はかなり一般化してきている。たとえば、『仏教文学集』（筑摩書房『日本古典文学全集』の一冊）、『仏教文学研究』一〇十二（宝蔵館）、「仏教文学会」など、書名や研究団体名に用いられているのを見てもそのことが知られる。

しかし、それなら「仏教文学」とはいかなるものを言うのかと、あらためて問いかけてみると、意外にあいまいなところがあるのもまた事実である。言うならば、仏教文学という術語は、その学界における流布の割には漠然とした概念しか付与されていない。

おおまかな言い方をすると、この語の概念規定にはこれまで二つの系列があった。一つは、『法華経』、『阿含経』、『大智度論』など、仏教経典そのものを文学とみて、これを仏教文学とする系列である。いわゆる経・律・論の三蔵を仏教文学の主体とみなすわけで、小野玄妙・山辺習学ら仏教学者の著書にこの傾向が顕著にあらわれている。

これに対し、仏教文学を仏教思想、仏教信仰、仏教儀礼などと深くかかわっている文学作品と解し、仏教讃歌（和讃・教化・伽陀等）、仏教説話、法語などを中心として、『平家物語』、『方丈記』、『徒然草』のようなものまでも仏教文学とみる立場がある。坂井衡平・坂口玄章ら国文学者の研究や著書にこの傾向が強くあらわれている。

一口に仏教文学と言っても、このようにまったく対蹠^{たいしよく}的な概念規定が並行して行われてきたことは否定し得ないところであろう。このことが仏教文学という術語の意味内容をあいまいにしてきた第一の原因だと思ふ。仏教經典そのものを文学とみる人々は仏教学者に多いのだが、立場の相違によって、「仏教文学」という共通の用語の内容に分裂が見られる事実を、いつまでも不問のまま放置しておくべきではない。その統一概念をめぐる一度は考えておかねばなるまい。

二 仏教学者の仏教文学観

出現の順から言うと、前者（小野・山辺）の立場が早くあらわれ、後者（坂井・坂口）はおそく出てきた。そして今日では、前者にかわって後者がいわゆる仏教文学の主流を占めていると言ってよからう。現に、一般に仏教文学と聞いて思い浮かべる内容は後者の方である。なぜこのような転換が行われたのか。まず考えられることは、今日仏教文学を云々^{うんぬん}する層の大部分が国文学者だからである。仏教文学会に名を連ねる人々がほとんど国文学出身者である事実をみればこのことは理解されよう。わが国の文学というものに視点を置けば、漢訳經典や漢文の典籍は取り扱いの対象外となるのは当然である。第二に考えられることは、仏教学出身者の中に仏教經典を文学として扱おうとする人がいなくなったことである。今日仏教学者の間には仏教文献学は存在するけれども、經典そのものを文芸的な次元で把握しようとするのは広い学問はほとんど行われていない。この二つの

条件が重なって、仏教經典を文学とみる仏教文学の立場が、後発の、仏教とかかわりを持つ文学を
仏教文学とする立場へ、その地位を譲ったのではないかと思う。

だが、よく考えてみると、「仏教文学」という造語法では小野玄妙・山辺習学の概念規定の方が
むしろ妥当なのではあるまいか。それは仏教における文学という意味に取るのが普通で、仏教的な
文学という意味ではない。キリシタンによる文学をキリシタン文学といい、同様に農民による文学
を農民文学という。これをキリシタンの文学、農民の文学とするのはおかしい。ところが、仏教思
想や仏教儀礼とかかわりを持つ文学なら、これはむしろ仏教的文学とすべきではなからうか。その
造語法からみても、小野・山辺らの立場はすっきりしている。

それなら仏教經典類をそのまま文学とみなすことは果たして可能かという問題はどうかであろう。
われわれの文学の概念からすれば、經典類は文学的でない要素を持っていることは否定し得ない。
それは宗教的規範として作られたものであって、美的表現を目的としたものではない。発想が類型
的であり、表現にリアリティが乏しく、作者像（群にせよ個にせよ）も明らかでないものが多い。こ
のように文学性を否定する要素がいろいろあるけれども、それでもなお、そこにみられる構想力、
劇的性格、趣向、偈頌^{げう}、比喩^{ひよ}等、文学の場で扱うべき諸要素を多く持っている。信仰の問題はとも
かくとして、それらを文芸的な作品とみなす条件は具備していると思う。

山辺習学がその『仏教文学』の中で、漢訳經典を日本式訓読法で読むことの危険を指摘していた
ことがこの際思い合わされる。われわれは漢訳經典をふつう特殊な日本式訓読法で読み下してゆく

わけだが、この翻訳の再翻訳という過程を通じて、それが原初に持っていた文学性は、ほとんど根本的に破壊されつくしてしまふであろう。したがって、ただ意味がとれさえすればよいという日本式訓読法の感覚で、經典の文学性の問題を云々してはならぬとする山辺習学の指摘にまったく同感せざるを得ない。

三 国文学者の仏教文学観

さて、以上のような理由から、仏教經典類を仏教文学とする立場に矛盾がないとすれば、仏教文学の概念をあいまいにしてしまった責任は、後発の、国文学者側の発言に帰せられるのではないかという気がしてくる。そこで、「仏教の思想や信仰と深いかわりを持つ国文学」ということをもって仏教文学とする立場について考えてみよう。

天台宗の僧侶であり、かつ偉大な国文学者でもあった筑土鈴寛（一九〇一—一九四七）はかつて『日本文学大辞典』（新潮社）の仏教文学の項を執筆したとき、その概念を次のように規定した。

（一）文学的価値如何を問題とせず、宗教的価値を目的として製作されたものであるが、それに文学的価値が付随的に伴はれてゐるもの。

（二）宗教的現象を素材として、文学的要求から創作されたもの。即ち製作動機が芸術的であるもの。而してこの種の作品のうちには、宗教的要素が豊富なるがため、宗教的価値要求

から創作されたもののやうに見受けられるものがある。『平家物語』の如きがそれである。

(三) 宗教的価値と文学的価値とが同一の強さで主張され、要求されてゐるもの。

右の三項目を挙げたあとでさらに次のような説明を加えている。

およそ以上の三類に於て、第一を宗教文学の本質的なものと称する向きもあるが、理想とすべきは第三の性質をもてるものであらう。第二類は宗教文学と称するには少しく純粹さを欠く。が、ここに分けた三類の性質に属するものすべてを宗教文学——仏教文学——と称してよいと思ふ。西欧の学者は、経律論三藏聖典すべてを仏教文学と称して研究してゐるが、このうち、哲学に終始してゐる論藏を除外すべきは当然のことである。が、その他一切の聖典は哲学的教理的取扱ひが出来ると同時に、文学的取扱ひも出来るのであつて、一種の創作でもある。故にインド仏教文学なる呼称も可能である。更にシナに於ては漢訳聖典は一種の翻訳文学であり、又仏教の普及につれて、シナ自国の仏教文学が多数創作されてゐる。ここにシナ仏教文学と呼ぶべき国土的仏教文学の一群が存するわけである。日本にもまたかく国土的に呼びうる仏教文学が存する。ただし日本に於ては漢訳聖典をそのまま日本仏教文学と呼び得ないのはもちろんである。それには、和訳・純日本訳の聖典翻訳文学とも称すべきものが生まれなければならない。かつたのであるが、かかる翻訳は殆んど生まれなかつた。今日と雖も未だ純粹な聖典翻訳はなく、従つて日本仏教文学には聖典翻訳文学が存せぬわけである。